

I 明治期における盛岡市の災害

～『盛岡市史 第7分冊「明治期下」

「第6章 公安」「第3 災害」(P219～P236)』より～

1 洪水

藩政時代より洪水による被害は甚大であったが、明治に入りても大小の洪水に頻々^{ひんびん}として見舞われた。

安政元年6月1日諸川洪水あり、中にも雫石川の出水多く、三ッ家^{※1}の民戸は32,3戸流失し、馬場小路^{※2}・川原小路^{※3}もまた浸水した。

(明治元年5月の降雨等)

明治元年5月降雨つづき、29日諸川水蓄^{かさ}が増したので、新山船橋^{※4}の橋板を撤去したが3日ののち復旧することを得た。当時奥州鎮撫使九条道孝仙台より盛岡に向うこととなつたので、前駆視察として参謀前山誠一郎が来たのであったが、板橋を撤したのであり、かく激流うずま^く中に舟を出すことが出来なかつたのであったが、誠一郎の激怒するところとなり、遂に舟を出したが、中流に至り激浪矢を射る如く舟を覆さんとし舟中色を失った。誠一郎金子を出し酒代とし舟子をはげまし漸^{ようや}く対岸に達することを得たのであった。のち3日の6月2日鎮撫使の一行到着した。橋は平常8枚の板を並列しているのであったが、このときなお水勢減じなかつたので4枚を並べ、やうやく渡ることを得た。

舟橋は船繩・抑柱・敷板で、金繩・大繩^{なわ}でつないでいるもので、仙北町と川原町^{※5}の兩岸と中島に舟の抑い柱が栗の木で長さ3間(約5.5m)、末に径2尺(約60cm)以上の丸物で、頭の切口に笠板をつけてあり、両町の岸に上流に6本、下の方に3本、中島には上に2本、下に1本を建て、柱の根固めには柱より2尺内外の周囲に丸太を打ち込み、その内に砂利を詰込み、上に人夫4名肩以上に相当する大石を重石として重ねて置くのである。

船の長さは6間(約3.6m)、巾6尺(約1.8m)ばかり、船縁は厚さ2寸5分(約7.6cm)の杉板で、底は3寸5分(約10.6cm)の松板、船に5寸角6寸の梁木あり、その内舳にある1本と、マダ皮または葡萄皮の太い繩^{なわ}で舟を金繩に繋ぐ、舟の数は中島より双方に12艘ずつあり、舟の上盤^{じくろ}には舳艫に駒よけを設けてあった。寒中には金繩^{なわ}が切れることあるので、また皮や葡萄皮の大繩^{なわ}を金綱に、添えておくのである。

敷板松板にて長さ3間(約5.5m)、巾8寸(約24cm)、厚さ4寸(約12cm)で、横8枚をならべ、橋巾は1間と4寸(約1.9m)、縦は舟の上盤の中心で板をつなぎ合わせるが、藩主の通過されるときには、敷板4枚を増し12枚とし、高欄をつける、他領の藩主や幕府の役人が通行のときには板を10枚とする。

船の出入や平水より5、6尺(約151cm～182cm)も水嵩^{かさ}が増せば船を引く、中島の柱より仙北町河岸に12艘、川原町^{※5}に12艘引く、増水の引船減水の架橋、いずれも水主頭の指揮に従い、御水主が取扱う。両方に水主頭は一人ずつあり、橋の取締をしている。仙北町の下川原に11軒あり、水主が住まっている。仙北町河岸に船番所あり水主の仕事を監視する役人が昼夜詰めていた。

明治6年8月20日新山舟橋^{※4}を土橋にあらため、渡初式を行った。長さ83間(約151m)、幅4間(約7.3m)である。橋の落成日については異説がある。そののち明治17年にあらためて架橋した。長さ80間3尺(約146m)幅4間(約7.3m)であった。

(明治7年6月の水害)

7年6月17日より大雨あり、19日に大增水で、北上川の水嵩1丈5尺(約4.5m)に達し、明治橋流失し、中津川もまた増水甚しかった。

(明治8年7月の水害)

8年7月8日大雨洪水となり、10月中津川増水し上下両橋流失し、北上川もまた氾濫して、明治・夕顔瀬両橋流失したので、上の橋・下の橋に仮橋を架し1銭^(注)ずつの橋銭を課した。

9年3月20日夕顔瀬橋が出来、4月1日下の橋、5月上の橋落成した。いずれも板橋であったが、のち土橋にあらためられた。

(注) 原文では「かねへん」のない字が用いられている。

(明治10年9月の水害)

10年9月10日中津川増水8尺(約2.4m)に達し、下小路^{※11}仮橋が流失した。

(明治11年7月の水害)

11年7月31日中津川・北上川出水し、下の橋仮橋が落ちた。3橋は無事であったが、上、中2橋の擬宝珠をはずして万一にそなえた。このとき馬場小路^{※2}・多賀^{※9}・川原町^{※5}等浸水し、明治橋の一部が壊れた。雫石川もまた出水、三ツ家^{※1}の家屋2戸流れた。

(明治22年夏の大水)

22年夏大水、11月紺屋町より内丸に通ずる道路を開き、中津川によの字橋を架けた。

このよの字橋の架橋は18、9年ごろ紺屋町にあった国立第一銀行支店が、国庫・県金庫取扱のため、毎日県庁に往復するため不便であるので、その裏門よりいまの市役所へ仮橋を架けたので銀行橋とよばれていた。紺屋町には消防のよ組があり、その組頭の藤沢三治はいまの国民劇場のあるところに藤沢座という芝居小屋を経営していた人であるが、若し河北内丸方面に出火

の通りに消防組は上の橋か、中の橋をまわらなければならないので、銀行橋が流失したので、銀行はじめ、有志者の援助を得て22年11月人家を取払い、紺屋町より内丸に通ずる道路を開き、いまの位置に架橋したので、^{あたか}恰もよ組のわきにあったのでよの字橋と名づけられたのであった。

(明治23年4月・7月の大水)

23年4月6日、19日と7月7日に大水あり、同年11月市内新築地^{しんちくち}※12より厨川村木伏^{※7}に至る北上川に土橋を架けた。23年9月日本鉄道会社経営の東北鉄道開通し、盛岡停車場は厨川村平戸^{※8}に設置されることになったので、開運橋が架橋になったことは第3章市会に於ける問題第2に記した如くである。架橋費その他の諸費 6,551円78銭2厘より9ヵ月間の収入橋銭 1,552円40銭を差引き、4,999円38銭2厘で市に買収されたのは、24年8月31日であった。

(明治29年6月・7月の水害)

29年6月9日より7月20日まで降りつづいた間、3日の晴天に過ぎず、20日午後2時より大雨となり、夜に至るも止まず、翌21日に亘り北上川氾濫し、夕顔瀬橋一部陥落し、開運橋墜落した。馬場小路^{※2}・多賀^{※9}・川原町^{※5}・鉦屋町・神子田や、対岸の仙北町・青物町^{※10}みな浸水し、築川橋も流失した。中津川の増水は北上川より水量少く17戸浸水したに過ぎなかったが、山岸と下小路^{※11}に倒壊した住家2、3戸あった。北上・中津両川沿岸の損害は堤防欠潰延長85間(約155m)、堤防欠所135間(約245m)、道路毀損1,513間(約2,751m)、護岸工事破損20ヵ所、水路破損3ヵ所、橋梁流失1、橋梁破損17ヵ所で、開運橋水切2本流失するの大損害であった。

(明治29年8月の水害)

8月3日夜来の大雨で諸川増水し、北上川は1丈3尺(約3.9m)に及び、神子田・鉦屋町・三戸町^{※12}と多賀^{※9}等被害甚しく市の焚出しをうけたもの鉦屋町80名、川原町^{※5}80名、神子田50名、多賀^{※9}46名に及んだ。さしもの豪雨も、夕刻に至りやみ、上田堤も一時危急をつげたが、溢水を他にみちびき幸に決潰をまぬがることを得た。

(明治29年9月の水害)

9月8日また北上川の出水1丈3尺5寸(約4.1m)で開運橋は復旧工事中で橋桁を架し橋板を敷くまでになっていたが、橋梁と橋脚流れ、中津川は7尺(約2.1m)以上の増水で、紙町^{※13}側の石垣45間(約82m)決潰し、下小路^{※11}に流失家屋2戸あり、雫石川もまた1丈(約3.0m)の増水で、諸川の沿岸浸水甚しく、多賀^{※9}・三戸町^{※12}は各58名、神子田50名、鉦屋町60名、川原町^{※5}・万日^{※14}160名、下小路^{※11}・大沢川原各20名が市の焚出しをうけた。

当年は東海岸に大海嘯^{しやう}(注)あり、洪水または諸処の被害甚大で、嘗^{かづ}てない災厄の年であった。

(注) 明治29(1896)年6月15日午後8時頃に三陸沖で発生した地震に伴う大規模な津波。三陸沿岸を中心に死者約2万2千人、流出、全半壊家屋1万戸以上の被害が発生した。

(明治30年9月の水害)

30年9月9日北上川また出水、開運橋の水切5本流失し、諸処に多少の浸水があったが軽微の損害に止まったことは幸であった。

(明治31年8月・9月の水害)

31年8月31日より9月4日に至る5日間に降雨あり、中津川の出水多く、山岸・下小路^{※11}私設の両仮橋流失し、大沢川原裏の耕地3反歩余欠潰した。

(明治33年8月の水害)

33年8月12日大雨、北上川出水、水量13尺8寸(約4.2m)に及んだ。国道筋仙北組町^{※15}において橋梁や家屋の流失多く小児1名溺死した。中津川は出水1丈2尺(約3.6m)、上の橋の水切柱1本流失、浸水家屋は仙北組町^{※15}191、鉦屋町118、神子田110戸であった。

41年秋、川原小路^{※3}より岩手公園下毘沙門に通ずる中津川に、市会議員の高橋伊兵衛・村井三治・栃内秀政の3名発起人となり、附近有志者の寄附により架橋し、毘沙門橋と名づけられた。

(明治43年8月・9月の水害)

43年8月と9月に大洪水あり、ことに9月3日は未曾有の大洪水で全市中浸水をまぬがれたのは僅^{わずか}に六日町^{※16}だけであった。北上・中津二川の出水甚しく3日午前2時には北上川1丈5寸(約4.5m)、中津川6尺(約1.8m)に達し、両川沿岸の市街地に浸水し暴風雨止まず、見るまに増水急に、5時にはよの字・毘沙門の両橋落ち、北上川は1丈2尺5寸(約3.8m)、中津川は8尺(約2.4m)以上に出水し、7時には下の橋流失し、8時より9時に至り、家屋木材流下のため、明治橋・上の橋もまた流失するに至った。家屋の浸水甚しく警察・消防等八方救護につとめたが力及ばず、午前11時ごろ騎兵2個中隊、工兵1個中隊の来援を得たが、午後2時に至り中の橋も遂に落橋し、ために市は三分せられ交通全く杜絶し、わずかに残余の電話線により連絡することを得た。ために市内各方面に11ヵ所の罹災者の避難所を設け千余人を収容し、7ヵ所に焚出給与所を設け数千の罹災者に給与した。

雫石川また増水し沿岸の被害多く、本宮村の堤防決潰し、激流鉄道線路を破壊し、ために汽車不通となり、仙北町の浸水^{もっと}尤も甚しかった。築川に於ける盛岡電気会社発電所の堤防決潰

し、被害甚しく発電不能となり、夜に入り市内暗黒となり、凄惨言語に絶した。10時以後北上川の増水ますます加わり、^{しんちくち}新築地^{※12}の堤防は決潰に瀕したが、工兵隊・警察官消防必死の協力の下に決潰流失をまぬがるゝことを得た。4日午後には北上川1丈6尺余(約4.8m)、中津川はほゞ1丈2尺(約3.6m)に及んだが、3時より2川とも漸次減水するに至ったので、午前10時に至り、工兵隊は中津川の激流を冒して渡船を2ヵ所に開始し、また北上川に於ては明治橋流失の地に渡船を開き、^{ようや}漸く市内に於て^{れん}連絡することを得た。

被害は死者1名、傷者1名、住家全潰17、半潰49、破損271、流失69、床上浸水1,343、床下浸水1,147、橋梁流失11、田浸水約120町歩、畑浸水65町歩に及んだ。

当市に於ける被害は以上の如くであるが、県下全般の被害また甚大で、北上川沿岸は云うまでもなく、支川氾濫せざるなく、岩手・紫波・稗貫・和賀・胆沢・江刺・東西磐井の各流域^{もつと}尤も甚しく、就中、岩手(盛岡市以外)・東西磐井3郡の被害多く、4日午後5時西磐井真滝狐禅寺は水量4丈7尺(約14.2m)に達した。

9月の洪水につき新聞(毎日、43、9、4-6)の報ずるところを記し、当時の惨状を偲ぶことゝする。

一昨日(2日)は曇天なりしかども、午前中は唯生暖く風はなかりしかば、先づは平穩にて過し得べしと一同樂觀し居りしが、昼頃より降り出せし雨は夜に入り益々激しく千万本の銀条車輛を覆へすかと計り^{よもすがら}終霄更に寸暇の絶間なく、中津川・雫石川・築川・北上川の諸流^{にわ}俄かに増水して遂に黎明^{せい}警醒の鳴轟を聞くに至れり。

中津川沿岸は…遂に堤上を越えて氾濫し、^{すて}已に川留橋を粉碎したりしが、…諸橋流失の^{おそ}虞れあるより上の橋・中の橋の擬宝珠を撤し、橋上に人馬の往来を禁じ、土俵大石を堆積して耐持し居たるが、…午後7時に至り遂に大鳴轟と共に上の橋を流失せしめ余勢を駆つてよの字橋を壊滅^はし了んぬ。

かゝりし程に豪雨と共に水は刻一刻に増加し来り寸暇の絶間なく市中に氾濫し来る毒水は遠く八幡町^{えさし}・餌差小路^{※17}方面にまで漲り入り、はては中津川下流なる高等小学校背後の堤防を決潰し、且つ川原小路^{※3}より杉土手^{※18}に至る間一面に乗り越えたれば、之が為に浸水せる鷹匠小路^{※19}・馬場小路^{※2}等はさながら百川横流せるに異ならず、対岸も之に準じて大沢川原に続く道路^{なみ}渦瀾の中に葬り去られたり。勢かくの如くなれば、公園に架せる毘沙門橋の洗ひ去らるゝと共に、下の橋も其危さ限りなくあれよ〜と見る中に上流より放下せらるゝ橋梁の破片橋柱に奔突して暫時が程に跡形もなく寸断して激流中に捲き去れり。かくて河南と河北に連絡するは唯一の中の橋あるのみに至れり。

市内の出水かくの如くなれば、警察署・消防組等の努力のみにては如何ともすべからず、依つて急を遙かに市西の兵營に告げ其の助力を乞ひしに、時を移さず工兵隊・騎兵隊の出勤あり、士卒を8方に配して備をなせるが、時しも惨鼻を極めたるは川原町^{※5}にして、いち

早く全町水中に陥没し終り、市民は助けなくしていづれも暗澹たる天を仰きつゝ悲鳴し居れり。…然かも同町は非常なる低地に位せるを以て、多賀^{たか}*⁹一面と共に渺漫^{びょうまん}の泥海中に陥没し、大半は2階を超えて殆ど檐端^{のき}を濁流に洗はしむる惨状を来せり。かくの如くなれば明治橋附近などに近かんと思ひよらず…軍隊の出動に接したる警察消防夫等は之に勢ひを得、協力して筏を組み、舟楫^{かじ}を操りて2階の格子窓より避難せしめ居れり。市役所に於いては鉾屋町(惣門坂)なる小川儀助氏店頭^{のき}に炊出所を設けたるが、午前11時頃記者の視察に赴きたる時は、恰^{あた}かも炊出救護船を大清水小路^{おひだ}*²⁰より出す事に決せる折なりしを以て特に便乗を乞ひて市吏員西野・藤形・岩部氏と共に漫々たる濁流に押出せり。されば角材の流失頻りなるを以て危険云ふばかりでなく、一同死を決し、浸水家屋に近づくとや家屋平均45人位宛、2階にて相擁し飢に泣くのみにして夥^{おびただ}しき角材は益々激流に翻弄され、同町側一帯の家屋にドン〜と恐ろしき音して突当り止まりて山をなしつゝありき。其度毎にぎゞと物凄き音して揺出し今にも全町押し流れんとする有様なれば、罹民は更に顔色なく只泣くばかりなりき、されど危険なる材木の為め容易に近くべからず、漸^{ようや}く機を見、近づきて2階より炊出を給与したるが惨状極度に絶せり。

更に鷹匠小路^{たかざね}*¹⁹・馬場小路^{ばば}*²の惨状は言語に絶せり、前記の如く下の橋を打開して勝ち誇りたる河水は正午頃より益々激しく川原小路^{かわはら}*³を掠め城南学校の一角を犯して鷹匠小路^{たかざね}*¹⁹に奔下せるにぞ、向小路南側の家並に白沫^{あわ}相聞^{あひま}き屋内を貫通して無二無三に杉土手^{すぎど}*¹⁸方面へ流れ去る。市役所にては馬場小路^{ばば}*²工藤弁護士邸に事務所を置き全部泥海に浸り去れる同小路久保田喜代太父耕作(72)と称する患者を収容し居りしが、降り頻る雨、時を追て益々猛烈なるに水勢の急なること殆ど形容すべからず、工藤邸も危急に迫りたり。

午後3時に至りたれども雨止まず、而かも河南河北を連絡する唯一の橋梁と頼みたる中の橋も午後3時を過ぐる幾何もなくして遂に他の橋梁と同一運命に陥るこそ是非なけれ。同橋は工兵50名、寺田大尉の率ある騎兵200名並に消防第4・第5の両部協力して此時まで食ひ止め居たるも、遂に目にあまる水勢に抗しかね、天に沖する水煙と共に瞬時にして影も形も止めずなり果てたり。盛岡市はかくして東西全く断絶し終り対岸にありて途方に暮るゝもの、水を隔てゝ茫然^{すくな}たる者尠^{すくな}からず、時しもあれ警報は之に接して更に明治橋の流失を報じ来りぬ。…

中の橋流失を見る間に知事官舎・盛岡病院・岩手郡役所・高橋写真館・新建市庁舎・警察署・女子部・市役所一面奔浪の襲ふところとなりて警察署前の如きすら深さ尚腰部に達し、就中、秀清閣・秀清軒は濁流渦まけり。…知事邸にては県庁内に避難せるが、濁水は進んで大手先^{おてのせん}*²¹までも浸しぬ。転じて下小路^{したみち}*¹¹方面に至れば、これまた水深腰間に及び、家屋の流失頻発するより、町民は多く南部邸に免れたり。それより北方市内山岸は10余戸悉^{ことごと}く濁流に取巻かれ、本多・阿部二家、亀ヶ森・永田等の家族いづれも逃路を失ひ、唯運命を天に委ぬるより外なき有様なりしかば、午後5時頃に至り、小野寺警部自ら小舟に棹^{さか}さして奔流

中に突入し難なく救助するを得たり。若し夫れ市外山岸及び其対岸浅岸の至ては山の如き巨浪縦横に奔馳し被害益々甚しきに至らんとするも、到底人力を以て救助し難きに至りき。唯山岸に40人の避難者集れる。一家屋（戸主名番地不詳）大海の如き濁流中に浮び、正に流失せんとするも船舶なきを以て救助不可能にて、互に擁して叫ぶ様、惨鼻に絶せる由を報じ来れるのみ。

大沢川原小路^{※3}方面も悪水の氾濫^{たん}惨澹^{たん}として、古川端^{※22}・農学校附近の広田は全部没し去り、毒海と変じ街頭^{また}亦胸部に達し、浸水床上34戸に及ぶ。只農学校・原敬氏邸のみ水中馬背の如く浮べり。夕顔瀬橋及び開運橋は今まで流失を伝へ来らざるも危急^{いよいよ}愈々迫り、特に開運橋には工兵50名、騎兵100名及び消防第7部全員河岸を守れるが、勿論通行は思ひもよらず、停車場附近は全部浸水し流失家屋5戸行衛不明者3名ありたる避難者中より病者は機関庫に收容せり、…開運橋附近より雫石川落合方面を望める光景にして一望の泥海西方の連山に遮る程に満ちあふれ、杳渺^{ようびょうこうとう}浩蕩名状すべからず。…

扱て馬場小路^{※2}の方面は時を経るに従ひ、益々水勢を増すのみにして遂に下の橋堤防に大決潰を来し、鷹匠小路^{※19}は勿論上衆小路^{※23}・大清水小路^{※20}一円を濁流に埋め去り、見る間に河流と変じ、余勢奔馬の如く多賀^{※9}田甫の毒水海に合する有様にて、中津・北上の三角地点のやゝ高丘にある高等小学校は忽^{たちま}ちにして其半部を流失したり。然るに同校には聖上陛下の御真影あり、且つ30余名の避難民集会しあるを以て、4時頃野口工兵中尉は部下3名を引率し、前田巡查部長と共に船に乗じ之に赴きたるに已に同校には避難民のみにして教員等の影なく御真影さへ不明なれば宜しく引返す折りしも栗の木に取付救助を叫びつゝある同校教員青山智弁・遠藤幹次郎・沢口滝太郎及び使丁山田命助の4名を発見せり、依つて直ちに御真影を尋ねしに折良く奉持しありたれば、直ちに4人を救助し御真影は直ちに新穀町^{※25}佐藤庄助方に奉置し、昨朝九十銀行至に奉じた。…また城南尋常小学校も泥濘せる奔流のため中津川岸なる外塀を流失し、次で右側なる女子教室も見る間に崩壊し終り…

築川増水の為め、福名渡（ブナト）橋落ち、別に流材の突破は盛岡電気会社発電所に導ける水路の堤に昨朝数ヶ所の決潰を来し約70間（約127m）黄濁の水、鑪山の半腹より落下したれば、こゝに発電の途全く絶望となり、…向後数日間送電する能はずなりしより、盛岡市は夜に入るも電燈の光を見る能はず…かくて夕となりぬ。夕となるも暗雲愈々密にして雨晴れず、碓町^{※25}に激する水は加賀野・鍛冶町^{※26}・紺屋町に横流して午後5時過ぎ遂に大矢馬太郎氏所有の土蔵を破壊し家財を散失したるを始めとし、附近の被害^{おびただし}夥きを致せり。川原町^{※5}方面にては工兵隊は屋上に橋梁を架して或は背負ひ或は手を引きつゝ救護に尽力し、其他の各方面また油断なく水防に努めたり。…

夜を徹して今朝に至り、雨やゝ止みしも濃霧河面を蔽ひて咫尺を弁すべからざりしが、暗雲漸く灰白に明り来るや中津川岸の大惨害はまのあたりに現はれ来れり。…

全然地形を変じたる中津川に添ひて崩壊喪失の惨を尽せる罹災地は昨日（○6日）に至

るも尚晴れざる雨に破壁残軒いつ乾くべしとも思はれず、3万の市民^{しやう}悄として声を呑む、
…

山岸は一時大濁浪の襲撃に任せ形勢^{まき}將に全滅に帰せんとせるも漸^{ようや}く流失の難を免れし
と雖^{いな}も減水後の惨害は名状すべからざるものあり…

下小路^{※11}は流失したる村上清弥外2戸の跡は川床と変じ、僅かに一部の残骸を止めて未
だ去らざる濁流に臨みつゝあり、又春木場^{※27}に船越豊之外3戸流失したる跡川筋と変り濁
流の奔湍^{ほんたん}に任せ、惨状目を蔽^{おほ}ふ。

かくの如く惨害をきわめたのであるが、6日までに判明した被害は保安課の調査では、家屋
の全潰17戸、半潰49戸、破損は271戸、非住家50棟あり、流失69戸、非住家31棟で、浸水家屋
2,490戸、非住家372棟、内床上は1,343戸、非住家224棟、床下浸水は1,147戸、148棟に
達し、死傷者は1名にすぎないが、まだあるべき見込とある。

市役所はいちはやく河南は鉤屋町小川儀助・村井源三・新穀町^{※24}池野藤兵衛、六日町^{※16}池
野権治・高橋伊兵衛、仙北町木村仁太郎方に、河北は山岸平野喜三郎、油町^{※28}平井六右衛門
方に救護所を設け救護に当つた。山岸口の平野喜三郎、下小路^{※11}、紙町^{※13}口に桜雲閣、大沢
川原口に佐々木徳太郎は炊出給与をなし、赤十字救護団は三田俊次郎統率し、大清水小路^{※20}
木村宗光方に仮事務所を設けた。

救護者の総員は916名で内軍隊の救助にかゝるもの470名、警察官は202名、一般市民は
124名で、軍隊と警察協力して救助せるもの71名、軍隊と一般市民協力によるもの17名、警察
と一般市民の協力によるもの32名であった。

水害前後策の市会は6日開会され、仮橋架橋費1,500円、上の橋・下の橋2カ所、入夫賃
1,000円、材料費500円、扶助費1,500円、衛生費500円、事務取扱費500円、雑費500円、
計6,000円を計上し、土木係6名、衛生係6名、学校係3名、救助係6名、漂着物係6名をさ
だめ、市公民中の選出は、村井弥兵衛・金田一勝定・佐々木卯太郎・村井勘兵衛・宮田重治・
池野藤兵衛・岡田源太・太田小二郎・三田義正・水原庄兵衛の10名であった。

河北・河南を切断せる橋梁の修復はいちはやく着手され、上の橋仮橋は市内大工町の大工棟
梁戸沢甚太郎が渡船交通の不便を慨し、独力仮橋を架設を企て、6日朝より開通し、中の橋は
仮橋を廃し、工兵隊により永久的仮橋工事に着手し、下の橋もまた工兵隊により8日午前より
交通をゆるした。

(明治44年2月の水害)

以上の惨害につき、翌44年2月3日よりまたもや降りつづいた雨に風をそい、4日に至るも
なお歇まず、「いよいよ勢を増し、轟々と吹捲り荒れに荒れ、暗澹^{たん}なる空は墨を流せし如くに
して、暗を衝きて走る小山の如き激流は漸々高まり行くのみなるを以て、…此時已に馬場小
このすで

路^{※2}辺一帯はまたもや水に洗われ暗中を避難した」午後10時40分川留橋流失し、5日午前0時30分よの字橋流失し、上の橋左岸に接近した部分破れて凹み落ち下の橋右岸に4尺ほど決壊し、馬場小路^{※2}辺一帯はまたもや濁水に洗われ避難したが、第2部消防の目覚しい活動により幸に流失をまぬがれた。

舟橋と明治橋（万年青老人一小本正名稿，日報昭和7年6月）によるところ多いが、その他の記事もまた多く参酌した。

2 火災

藩政期に於ける大火は享保14年4月2日の1,933戸，安永7年の2,426戸，寺院22，文化3年の540戸があり，慶応元年2月7日には正午厨川・三ツ家^{※1}より出火し，材木町・長町^{※29}・平山町^{※30}・帷子町^{※31}・田町^{※32}・四ツ家^{※33}・仁王^{※34}・加賀野一円1,200戸を焼き尽くしたのを尤とする。

(明治8年4月の火災)

明治に入り8年4月17日午後8時すぎ大風あり，山岸裏水車脇より出火し130戸をやいた。

(明治17年11月の火災)

次で17年11月4日の火災は尤も惨害をきわめた。17日より19日午後8時まで大風はげしく，午後2時半下の橋側監獄署因徒衣服置場より出火した。因人の放火によるもので，折柄の西暴風雨に煽られ，火の手は六日町^{※16}・穀町^{※35}・馬町^{※36}・十三日町^{※37}・寺の下^{※38}・餌差小路^{※17}・呉服町^{※39}の一部，肴町・葺手町^{※40}の一部，生姜町^{※41}・八幡町・八幡町片原^{※42}・志家の一部より，小人町^{※43}・川原小路^{※3}に及び，翌午前2時に至り鎮火した。焼失戸数1,432戸，土蔵46棟，神社10社，寺院10カ寺，学校3，死者620名，負傷者655名に及んだ。各町の焼失戸数は明治篇上（214頁）に記してあるので省略に従う。

(明治18年以降の火災)

18年4月神子田より出火26戸，20年4月仙北組町^{※15}より出火36戸，24年1月新田町片原より出火20戸と5月長町^{※29}より出火した26戸に止まる。30年4月2日午前2時10分，光照寺隠居の居間よりの出火は，隣接の同宗唯一の大伽藍本誓寺を焼き払い，専立寺に及び，遂に東隣の清養院を一舐に焼き尽し，5時30分に至り鎮火することを得た。光照寺は本堂庫裏土蔵全焼し，本誓寺は本堂庫裏全焼，土蔵半焼し，鐘楼は瓦根をやいた。清養院は本堂庫裏全焼し，秋葉3尺坊堂は半焼に止まった。

本誓寺は唯一の什宝なる黒仏をはじめ、仏体・仏器は搬出したが、庫裏内の内仏や器物の書画袈裟等をおさめた長持3個の中1個烏有に帰し、光照寺も同様仏具等をみな焼失したことはおしむべき限りであった。

3 地震

地震は貞亨3年3月2日岩手山の墳火は地震を伴い、盛岡以西に^{おびただ}夥しい地灰を降らしたのと、安政2年江戸大震の翌年8月の劇震あっただけに止まるが、明治29年8月31日午後5時の地震は、前後に見ざる大震で、土蔵の亀裂や架上の物品の墜落に過ぎず、幸に人畜の死傷なごったが、45日前より数度遠雷の如き音響あり、31日午前3時に強震あり、5時にますます甚しく十余分に及び、「地は土^{けむ}煙りを揚げて上下し明に地表の波動を畫くを認め「家屋の震盪^{とう}すること小船の波浪に翻弄せらるゝが如く柱梁^{きし}の軋る響、物品の顛落^{てん}する音戸外に達し、地の鳴動は人の罵る声と和し、雑然^{ざつ}轟然人皆家を空うして走り出」でたのち強震つづいて夜に至り、二昼夜に及んだ。十数日の間毎日数次の震動あり、ほゞ1ヵ月に及んだが、なおかつ1日1回の微震がつづいた。ために障子を徹して眠ったものもあつたが、^{むしろ}蓆を地にしいて終夜眠らないものが多かった。筆者16才のときで、鍛冶町^{※26}方面ほとんど町の真中にねていたことゝ、岩手山噴火の噂あり、いくたびも手をかざして山を見たことをいまにおもいおこす。和賀・稗貫両郡は家屋の崩潰101戸、死傷46名に及んだ。同年6月15日は三陸の大海嘯^{しやう}で溺死18,158名を出したが市内には、^{かすか}些の微震だもなく、火薬の爆発したような音を耳にしたのみだと小本正名稿の盛岡市史稿に記してある。

< 本文中の地名等について >

- ※1 三ッ家 雫石川左岸の現在の中屋敷町方面
- ※2 馬場小路 現在の馬場町地内。下の橋から北上川方向に向かつての小路
- ※3 川原小路 現在の中ノ橋通一丁目、肴町、下ノ橋町地内。中津川左岸沿いの中の橋から下の橋あたりまでの小路
- ※4 新山船橋 現在の明治橋(昭和7年架設)より100mほど下流の「新山」と呼ばれた地に、木造の橋(明治6年架設)があつた。この木造の橋が架けられる前は、数艘の船を兩岸の大黒柱につないで橋にした「新山舟橋(しんざんふなばし)」によって兩岸は連絡されていた。
- ※5 川原町 現在の南大通三丁目から鉾屋町にかけての地域
- ※6 新築地 現在の開運橋通地内。北上川左岸の開運橋際のあたり
- ※7 木伏 現在の盛岡駅前北通。北上川右岸の夕顔瀬橋から旭橋にかけての地域
- ※8 平戸 現在のJR盛岡駅付近
- ※9 多賀 現在の清水町から南大通三丁目にかけての地域
- ※10 青物町 現在の仙北一丁目地内。明治橋際の「徳清」付近から西側の東北本線付近にかけての地

域

- ※11 下小路 現在の愛宕町地内。中津川右岸の盛岡中央公民館から富士見橋にかけての地域
- ※12 三戸町 現在の本町通三丁目，中央通二・三丁目地内。盛岡税務署から中央通付近にかけての地

域

- ※13 紙町 現在の上ノ橋町，紺屋町地内。中津川左岸の上の橋際かいわい
- ※14 万日 現在の鉾屋町地内。旧盛岡市立病院かいわい
- ※15 仙北組町 現在の仙北二丁目地内。J R仙北町駅周辺
- ※16 六日町 現在の清水町，下ノ橋町地内。盛岡信用金庫六日町支店周辺
- ※17 餌差小路 現在の南大通一丁目，肴町地内。盛岡市立杜陵老人センター周辺の地域
- ※18 杉土手 現在の清水町，南大通三丁目地内。北上川左岸沿いの地域
- ※19 鷹匠小路 現在の下ノ橋町，馬場町，肴町地内
- ※20 大清水小路 現在の清水町，南大通二・三丁目地内
- ※21 大手先 現在の内丸地内。岩手県庁や公会堂の北側方面。江戸時代には「大手先御門」が置かれていた。
- ※22 古川端 「古い北上川の側」の意。北上川は，かつては現在の開運橋の北側から大通や菜園方面を流れ，農林会館付近で南下し，盛岡城西側に隣接し，岩手女子高等学校付近で中津川に合流していたが，盛岡藩第4代藩主南部重信による付替工事が1673（寛文13）年から1675（延宝3）年まで行われ，現在のルートとなった。
- ※23 上衆小路 現在の清水町，下ノ橋町，馬場町地内
- ※24 新穀町 現在の南大通二丁目，清水町地内。岩手銀行惣門支店付近から盛岡信用金庫六日町支店付近にかけての地域
- ※25 磧町 現在の加賀野一丁目地内。中津川左岸沿いの地域
- ※26 鍛冶町 現在の紺屋町地内。上の橋周辺から与の字橋周辺にかけての地域
- ※27 春木場 現在の加賀野一丁目地内。中津川左岸沿いの地域（通称「磧町」）
- ※28 油町 現在の本町通一・二丁目地内。本町通の北側の通りに沿う地域
- ※29 長町 現在の長田町方面
- ※30 平山町 現在の中央通三丁目地内
- ※31 帷子町 現在の中央通三丁目地内
- ※32 田町 現在の本町通三丁目，中央通二・三丁目地内。盛岡税務署から中央通付近にかけての地域（＝三戸町）
- ※33 四ッ家 現在の本町通二丁目地内。仁王小学校から岩手医科大学にかけての地域
- ※34 仁王 現在の大通三丁目から中央通二丁目・三丁目，本町通二丁目・三丁目にかけての地域
- ※35 穀町 現在の南大通二丁目，清水町地内。岩手銀行惣門支店付近から盛岡信用金庫六日町支店付近にかけての地域
- ※36 馬町 現在の南大通二丁目，清水町，肴町地内。東北銀行南大通支店から毘沙門橋方面にかけての地域
- ※37 十三日町 現在の肴町，南大通二丁目地内。盛岡市役所肴町分庁舎付近から南大通までの通り沿いのまち
- ※38 寺の下 現在の太慈寺町地内
- ※39 呉服町 現在の中ノ橋通一丁目，肴町地内。プラザおでっから盛岡市役所肴町分庁舎にかけての地域

- ※40 葺手町 現在の中ノ橋通一丁目地内。盛岡信用金庫本店や東家本店の周辺
- ※41 生姜町 現在の中ノ橋通一丁目地内。南大通を挟んで八幡町と反対側の地域
- ※42 八幡町片原 現在の八幡町かいわい。八幡町に直交する片側の町並を「片原町」と呼んでいた。
- ※43 小人町 現在の中ノ橋通一丁目地内。「葺手町」の東側